ヨーロッパ諸語における語彙の統一性と多様性

L ' unité et la diversité du vocabulaire dans des langues européennes

下 宮 忠 雄
Tadao SHIMOMIYA

語彙のことをドイツ語ではWortschatz（単語の宝庫）という。語彙こそは言語財 (Sprachgut) の主要部分をなすものである。語彙は言語のなまの部分、材料部分、原料であり、文法はそれを加工し料理し食卓に載せるための方法である。統一テーマの一環としての本稿は語彙の通時的な面に重点を置き、そのあとで共時面における問題点に若干論及する。表題の統一性とは、基本的な語の一つである " be " 動詞が印欧諸語に広く共通に見られることを指し、多様性とは、同じく基本語でありながら " have " は語派により異なることを指す。

1. 印欧言語財 (indogermanisches Sprachgut):印欧諸語に共通 (gemeinindogermanisch)。たとえば数詞や " be " 動詞。これは印欧語族成立の有力な証拠となったものであり、他の語族の確立のためにも重要な基準となっている。

数詞の場合、材料に関しては 1 から10までの語、 100の語は同じであるが（サ śatam, ギ he－katón, ラ centum, ゴ hund, リ šimtas, ロ sto)、1000の語はサ sa－hásram, ギ khīlioi, ラ mīlle (* smī－ĝhsl－ī) に対してエ thousand, リ túkstantis, ロ tysjat ' のようにゲルマン・バルト・スラヴの 3 語派が異なる語をもっている。また、 2 桁の数に関してはフランス語seize（ラ sēdecim, エ sixteen, 6＋10) - スペイン語dieciseis (10＋6)、フ vingt et un（エ twenty－one) - ド einundzwanzig (1＋20、オランダ語・デンマーク語も同様）のように配列される、など運用の方法に相違が見られる。「11」のエ eleven, ド elf, デンマーク語elleveはゴート語ainlifと同様「1つあまり」の意味である。ルーマニア語unsprezece, アルバニア語njëmbëdhjetëはスラヴ語（例：ロシア語odinnadcat ') にならって ' one－on－ten ' の言い方をする。また、ケルト諸語は20進法 (vigesimal system) を用いるが、デンマーク語とフランス語にもその名残りが見られる (Julius Pokornyによると、これはアルメニア系の鐘形盃民族Glockenbecherleuteがヨーロッパにもたらしたものである）。

" be " を表わす印欧語根 * es－「…である、居る」がサンスクリット・ギリシア・ラテン・ゲルマン・スラヴ・ケルトの諸語に広く見られるのに対し、所有を表わす動詞は英語have (* kap－捕える）、ラテン語habeō (* ghabh－与える：英give)、ギリシア語ékhō (* segh－つかむ：ドSieg勝利）、ロシア語imeť（原義：取る）のように言語によって異なっている。これは個別印欧語的 (einzelindogermanisch) の例である。

2. ラテン語・ギリシア語起源の文明語彙。

学術用語・教会用語等はヨーロッパ諸語に共通である。言語学・詩学・文法の用語はギリシア語が多い。品詞名はラテン語起源である。イタリア語ではギリシア語起源のglottologiaを、他の言語ではラテン語起源のlinguisticsを好む、という事例もある。言語学の雑誌名にもLinguaとGlossaがある。

月名 (Monatsnamen) はラテン語起源でヨーロッパ全体に共通であり、近代ギリシア語においても同様である。週名 (Wochentagsnamen) は言語によって異なり、多くの場合は、ラテン語の呼称に従って diēs Sōlis＝Sunday, diēs Lūnae＝Monday, lundi のように言う。ロマンス諸語は日曜日を「主の日」という（フ dimanche, ス domingo) 。ロシア語は「復活」 (voskresenje) 、他のスラヴ語は「無労働日」（ポ niedziela) という。曜日名は神名によるもの (deity system) 、天体名によるもの (planetary system)が主であるが、ロシア語のように月曜日から数えて「２日目」 (vtornik, 火曜日)、「４日目」(četverg, 木曜日)、「５日目」 (pjatnica, 金曜日）と言ったり、ポルトガル語のように日曜日から数えて「２日目」 (segunda－feira, 月曜日)、「３日目」 (terça－feira, 火曜日）等々のように言う。アイスランド語thridhjudagur「３日目」＝火曜日、現代ギリシア語tríti「３日目」＝火曜日はポルトガル語と共通している。

３.近隣諸語からの借用語 (Lehngut aus Nachbarsprachen) 。ロマンス語の場合、その統一性(unity, Einheit)は、かなりよく保たれているとはいえ、個々の場合、かなりの離脱 (deviation, Abweichung) が見られる。色採名のような基本的な語彙でさえ、外来語が意外に多い。フランス語blanc（白い）、bleu（青い)、brun（褐色）はゲルマン語から、スペイン語・ポルトガル語azul、イタリア語azzurro（青い）はペルシア語からの借用語である。「戦争と平和」の「戦争」はフランス語guerreからイタリア語guerraまでゲルマン語からの借用語であるのに対し、ルーマニア語războiはスラヴからの借用語である。「平和」のほうはすべてラテン語pāxに由来している。ロマンス語の場合「山」はすべてラテン語mons, montisに由来するが「森」のフランス語bois、スペイン語・ポルトガル語bosqueはゲルマン語からの借用である (cf. 英語bush) 。「佐官」（壁つくり）のフランス語maçon（英語masonはここから）はゲルマン語＊makkja「作る人」 (cf.英語make) から、スペイン語albañilはアラビア語から、イタリア語muratoreはラテン語からの直系、ルーマニア語zidariはスラヴ語からの借用である。

4. 新語 (Neubildungen) 、複合語、派生語。

文明の発達とともに、新語の必要が生じるが、多くの場合、在来語 (native words) を用いて複合語や派生語を作る。「鉄道」ド Eisenbahn, フ chemin de fer, ス ferrocarril, イ ferroviaはいずれも「鉄の道」であり、英語railwayだけが異質の名称をもっている。「飛行機」はフランス語・スペイン語avionは「大きな鳥」、英語airplaneは「空中板」、ドイツ語Flugzeugは「飛ぶ道具」、ロシア語samolëtは「自ら飛ぶもの」という。「タイプライター」は英語だけは「活字で書くもの」、他は「書く機械」という（フ machinè à écrire, ド Schreibmaschine, ロ pišuščaja mašina) 。

5. ロマンス諸語に共通のもの (gemeinromanisch) 。ラテン語のbonusはすべてのロマンス語に保たれているが、その反意語のmalus（わるい）は、フランス語ではmauvais (＜ malefatiusわるい運命の）のように複合語に由来し、単純語はj ' ai mal à la tête（私は頭が痛い）のように成句的表現に残る。イタリア語はcattivo (＜ captīvusとらわれた)、ルーマニア語はrăuという。「新しい」と「古い」はすべてのロマンス語に共通である（フランス語nouveau, vieux等）。「息子」と「娘」はラテン語fīlius, fīlia（原義：乳を与えられた者）がすべてのロマンス語に継承されている。

興味があるのは、このように共通している場合よりも、むしろ次項の、ロマンス語内部で異なる場合であ

る。

6. Einzelromanischロマンス語内部での異なり方には種々の型がある。数詞「16」について見ると、イタリア語はsedici（ラテン語sexdecim）で6+10、スペイン語はdieciseisで10+6、ルーマニア語はşaisprezeceでスラヴ語式に“six on ten”という。また「愛する」はフaimer, カタランestimar, ス・ポquerer（＜ラquaerere求める）、イvolere bene（ti voglio bene＝I love you）で以上はラテン系であるが、ルーマニア語iubiはスラヴ語からの借用である（ロシア語ljubit'）。以下に割れ方の若干を示す。

6. 1.　フランス語対その他：maison - casa；avec - con；acheter - comprare

6. 2.　スペイン語・ポルトガル語対その他：comer - manger；tener - avoir

6. 3.　ポルトガル語対その他：「火曜日」terça－feira - mardiのように曜日名。

6. 4.　ルーマニア語対その他：「友人」prieten（スラヴ語より）～ami；「敵」duşman（トルコ語より～ennemi

6. 5.　3言語以上に割れているもの：「町」フville, スciudad, ルoraş（ハンガリー語より）

「子供」フenfant, スniño, ポcriança, イbambino, ルcopil

6. 6.　文法的：フランス語・イタリア語はplūs bellusの型、スペイン・ポルトガル・ルーマニア語はmagis formosusの型。

6. 7.　「ノー」はnon, no, não, no, nuのように共通しているが、「イエス」はoui, si, sim, si, da（スラヴ語より）のように割れている。「ありがとう」もmerci, gracias, obrigado, grazie, mulţumescのように異なっている。

7. 以上の5と6はロマンス語に関して見たものであるが、その上部概念である印欧語全体を眺めた場合にも、当然のことながら語派単位の割れがある（indogermanische Dialektgruppen）。たとえば、次のものはゲルマン諸語とロマンス諸語は共通しているが、他の語派とは異なっている（英語とラテン語を代表に挙げる）。

germanisch－romanische Isoglossen：

light : lux

star : stella

fish : piscis

次のものはゲルマン語派とスラヴ語派が共通し、他の語派とは異なっている（英語とロシア語を代表に挙げる）。

germanisch－slavische Isoglossen：

love : ljubit'

apple : jabloko

silver : serebro

gold : zoloto

milk : moloko

「水」はゲルマン語・スラヴ語・ギリシア語・ヒッタイト語が共通している： water, voda, húdōr (< * wed－)、watar.「息子」「娘」は広く印欧語域にson, daughterの同系語が分布しており、ラテン語だけが（したがってロマンス諸語も）＊dhē (i)-「乳を与える」に由来するfīlius, fīlia「乳を与えられた者」を用いる。ちなみにfēmina「女」も同根語で、「乳を与える者」が原義である。

8. 語形成 (word formation) の観点からはゲルマン語が一般に複合語 (complex) が得意であるのに対して、ロマンス語はこれに弱いとされている。ただし「鉄道」はドEisenbahn, ス ferrocarril, イ ferrovia, フ chemin de ferで、フランス語以外は複合形成になっている。複合がかなり得意なはずのロシア語はželez－naja doroga（鉄の道）で形容詞＋名詞になっている。派生 (derivatio) はゲルマン語もロマンス語も非常に盛んである。

9. 語の対義性 (antonymy)。

太陽が昇る。The sun rises. Le soleil se lève.
太陽が沈む。The sun sets. Le soleil se couche.

日本語・英語・フランス語はこの場合、対称性がないが、ドイツ語は

Die Sonne geht auf.
Die Sonne geht unter.

のように共通部分をもち、上 (auf) 下 (unter) の方向辞だけで区別がなされる。
同様に、「出口」「入口」について見ると、

英	フ	ス	イ
exit	sortie	salida	uscita
entrance	entrée	entrada	entrata

は基体 (base) の共通部分がない(フ・ス・イは過去分詞の女性形が用いられている： allée, venue, ida, vueltaなど類例多し）が、

ド	ギ	ロ
Ausgang	éxodos	vyxod
Eingang	eísodos	vxod

は基体が共通し、接頭辞だけで区別している。

次は意味論と重なる部門であるが (champ sémantique, Bedeutungsfeld)、ロマンス語では「男」は同系語を用いるが、「女」はバラつきがある。「男」は一般に「人間」も意味する。

フ homme	femme
ス hombre	mujer
ポ homem	mulher
イ uomo	donna
ル om	femeie

歴史的意味論はこれを次のような図式で表わす。

次に、男と夫の関係については

エ man　　ド Mann　　フ homme

husband　　Mann　　mari

のように、ドイツ語は両者を区別せず、女と妻については

エ woman　　ド Frau　　フ femme

wife　　Frau　　femme

のようにドイツ語とフランス語は両者を区別しない。

10. 語彙の整合性（対称性symétrieと非対称性asymétrie）。若干の事例を掲げる。

「深い」「浅い」について：

英語　　deep : shallow

オランダ語　　diep : ondiep（深くない）

フランス語　　profond : peu profond

「少ししか深くない」はロマンス諸語に共通している。

「友人」と「敵」について：

英語　　friend : enemy

ドイツ語　　Freund : Feind（愛する人：憎む人）

アイスランド語　vinur : óvinur（非友人）

フランス語　　ami : ennemi（非友人）

ラテン語　　amicus : inimicus（非友人）

ロシア語　　drug : vrag（両者別語）

ブルガリア語　　prijatel : neprijatel（非友人）

ポーランド語・チェコ語・セルボクロアチア語もブルガリア語と同様である。

「少年」と「少女」について：

スペイン語　　muchacho : muchacha

ポルトガル語　menino : menina

イタリア語　　ragazzo : ragazza

カタラン語　　noi : noia

以上は男性形・女性形だけの区別（Movierung）であるが、英boy : girl, ド Junge : Mädchen, フ garçon : petite filleは別語を用いる。

最後に「王」「女王」「王の」について：

英語　　king : queen : royal

ドイツ語　　König : Königin : königlich

デンマーク語　konge : dronning : kongelig

フランス語　　roi : reine : royal

ラテン語　　rēx (< rēg－s) : rēgīna : rēgālis

ギリシア語　　basileús : basílissa : basílikos

英語は最も整合性を欠き、ド・フ・ラ・ギは整合性が美しく、デはその中間を示す。

11.結論：語彙の問題をいろいろな角度から見ると、どの言語が「あらゆる点で一番御立派」かは一概には言えないようである。しかしドイツ語とラテン語は概して「優」を、英語やフランス語は「良」を与えてもよいのではないか。しかして「可」を与えねばならぬ言語は私のとぼしい言語経験ではまだ見あたらない。

〔主要参考文献〕

Buck, C.D. 1971. A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages. University of Chicago Press.

Rohlfs, G. 1971. Romanische Sprachgeographie. München.

Watkins, C. 1985. The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots. Boston.

Zauner, A. 1926. Romanische Sprachwissenschaft. Bd. 2. Sammlung Göschen. 4. Aufl. Berlin-Leipzig.